

『映画『ケアニン』 &加藤忠相氏講演会』に参加して
ふりかえてもらった文章を掲載！
「感動と笑い、涙と勇気」

小林 順一（NPO 法人宮崎もやいの会代表）

今回の『映画『ケアニン』 &加藤忠相氏講演会』を、なぜ企画したのかということなのですが、加藤氏の介護施設での支援の在り方を講演録で知って、介護という枠の中だけの支援の在り方ではなく、福祉全般に通じる支援の在り方ではないか、と感じたので、映画「ケアニン」の上映会と加藤氏の「あおいけあ流介護の世界」の講演を開催することにしました。

あおいけあ流介護の特徴は、利用者と支援者という一方的な関係でなく、人と人との関わりである双方向の関係で支援を実践しているところがエッセンスであり、そのことによって、生きる活力や意欲を引き出す支援を積極的に実施することが自立支援につながることを実証している支援の在り方を、話してもらって多くの方に共有してほしいと企画した結果、色んな立場の方に今回のイベントに参加して感じたことをふりかえった文章を送ってもらいました。

映画「ケアニン」での介護士と利用者との関係を、支援する人、支援される人という一方的ではなく、人と人との関係で捉えることで、お互いが思い合うというあたりまえのことをモチーフに介護という世界で描かれ制作されている内容が、映画としてのリアリティをより強く感じられることになり、見る側の機微を揺さぶることになって、「感動と笑い、涙と勇気」を自然に醸し出していたことを実感しました。

涙した後に、加藤氏の講演を聴くことになり、忌憚のない言葉で、あたりまえの介護をドラスティックにクールでホットな語りで語られたことが、来場者をグイグイと引き込んでいくことになり、皆さん顔きながら聞いておられました。

彼の熱い思いが語りの中で強く感じられることの背景には、人を支える仕事が、これでよいのかという憤りを強く感じておられるからこそドラスティックに介護保険法や実践で得た事例など踏まえて話されることで、よりの確に理解を深めることになり、意識を変えて現場で活かすことに成ればよい、という意志を感じました。

私の師に、何事も「わかる」で終わったらだめで、次は「わかる」の一字変えれば「かわる」という言葉になるように、自分自身がかわったことを、実践を通じて示すことが大事で、実践することが真に「わかる」ということだと言われていたことを肝に命じているところです。

今回の『映画『ケアニン』 &加藤忠相氏講演会』を「感動と笑い、涙と勇気」というキャッチコピーで表してもらったことに、かわる要因としての言葉が大いに含まれていて、我が意を得たりで、とても素敵な言葉に感謝している次第です。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

葛島 慎吾（県立看護大学助教）

映画「ケアニン」上映会 & 加藤忠相氏講演会、とても素晴らしい会でした。

映画は、小規模介護施設の新人介護福祉士の主人公が、初めて担当をすることになった認知症の老婦人と少しずつ向き合っていく物語でした。

主人公は、試行錯誤しながら老婦人と関わっていき、老婦人やその家族との関係性の深まりの中で、介護福祉士として成長していきます。

人と向き合うとは、ケアするとは、といったことを具体的に考えることができる素敵な映画でした。

映画のモデルとなった「あおいけあ」経営者の加藤忠相氏のご講演は、ただ感動を呼ぶ話に終始するのではなく、介護（ケア）をする人々の仕事は尊いものであり、誇りを持って仕事をしてほしいといった願いを感じました。

認知症高齢者の安全を守るという名目で行動制限がなされることがありますが、私たちの日常では車の運転などリスクになるものは生活の豊かさにつながっていること、認知症高齢者のリスクを安易に奪うことは、生活の豊かさを安易に奪うことであることを説明されており、確かにそうだと思います。

また、加藤氏が繰り返しお話しされていたことに、“当たり前なこと”をしているだけ、とありました。

人が地域のコミュニティを基盤として、人の中でつぐられ、人と共に生きていくことはかつて“当たり前なこと”であったと思いますが、人間関係が希薄化している現代社会においては、“当たり前なこと”がなされにくい状況もあると思います。

人口減少に歯止めがきかない我が国においては、将来的な社会保障制度の運用に関しても心配になりますが、自分の目に映るあらゆる人々と共に生きる姿勢が貫かれれば、きっと乗り越えられると思います。

ケアの姿勢、福祉の問題、さらには社会全体の行方といった幅広い内容から、今後の自分の仕事のあり方を考察することにもつながり、有意義な時間になりました。

ありがとうございました。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

春永 純子（介護福祉士）

昨日の映画「ケアニン」上映と加藤忠相さんの講演会
感動と笑い、涙と勇気を沢山頂きました！

何ヶ月も前から、加藤さんの勉強会を開催して下さった小林さん、そして、会
を成功させようと一緒に語り合った皆さん、本当にありがとうございました。

あおいけあ流介護。

それは、何も不思議な事ではなく、ごく当たり前の事。

起きて、ご飯食べて、お風呂入って、トイレ行って、友達と話して、好きな時
間を過ごしてなどなど、当たり前のこと。

当たり前。

当たり前。

いつから、その当たり前ができなくなったのでしょうか？

歳だから？

障がいがあるから？

危ないから座って下さい？

徘徊？…私、徘徊って言葉、大嫌い。

入浴拒否？帰宅願望？問題行動？

介護あるあるの四字熟語（笑）

もっと、その人らしくできるはず！

もっと笑顔を引き出せるはず！

もっと当たり前の事ができるはず！

それが、できるかできないかは、

私、次第。

加藤さんと話して、茹で卵の薄皮がツルン！とむけたような気がしました！

とても心地よい時間を過ごすことができました。

本当にありがとうございました！

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

杉野 裕介（農業・綾るんるん畑 Producer）

私自身は介護の現場で働いているわけではない。

映画ケアニンは介護現場を舞台にしたストーリーである。しかしながら、この映画と特に加藤氏が講演された内容が、私自身の仕事（農業）にも通じる部分があると強く感じた。

講演の中で記憶に残っているワードとして「care(ケア)」がある。いくつか意味があると思うが、「気にかけること、関心を持つ、気配り」といった意味合いで捉えると、相手への向き合い方がひとつクリアになる。

つまり、過保護に厳重に管理するのではなく、相手の特徴を知り、その持っている能力を存分に発揮できるように見守る、もしくはそのような環境を整えること。

これは実は農業の世界でも同じことが言えて、いかに植物なり動物なりの能力をうまく引き出し、素直な成長を促せるか。

特に有機農業というカテゴリーにおいては、それが顕著である。農薬や化学肥料に頼らず、自然界の持つ仕組みを最大限活かし、それぞれの役割や能力に期待する。各々の能力を発揮しやすいよう環境を整え、サポートし、見守るという点においては共通しているのだ。

今後は、さらなる科学技術の発展に伴い、AI(人工知能)やロボット、ゲノム解析(遺伝子研究)、植物工場等を取り入れる農業も活発になると思う。生産性の向上や食料の安定供給、経営的な観点などからも積極的に取り入れられていくと思われる。

農業分野に限らず、介護の分野やその他の全ての業界において、科学技術で得られた英知を活用する仕組みが加速するはずだ。この動き自体はなんら否定するものでもないし、止まることもないだろう。

しかしながら、「ヒト」という生物が本来持っている根源的な部分は目覚ましい進化を遂げることなく、今後もそのままであり続けるような気がする。

ちょっと話が飛んでしまったが、何が言いたいかというと、地に足の着いた暮らしというか、泥臭いというか、ヒトとヒトであったり、ヒトとモノであったりが向き合う姿勢、心持ちは変わらないのではないかと。そのような部分を軽視したくないし、今後も大切にしたいと思ったのである。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

生駒 新一朗（あわいや代表）

1月25日に宮崎もやいの会主催の『映画「ケアニン」&加藤忠相氏講演会』に参加。

映画は、加藤さんの経営されている「あおいけあ」の事業所がモデルで作られた。新人介護職員と認知症の女性、その家族。自分にも向けられたような家族との関わり方の問。家族だからできる溝、家族だから迎える時間。運命の出会いで関わることになった介護の人もまたその人の立場でこすれていく。確かにある一人ひとりの歴史には、誰かの生きた証が重なる。

私自身の日常の反省も込めた振り返りを起こさせるストーリーに涙が止まらなかった。人として向き合うことが描かれていたからなのかもしれない。

映画の後の加藤さんの講演は一貫した考えと行動から、お年寄りと仲間と地域の方と関係性を深められている実践であり、実に熱がこもっていた。人間関係、信頼関係を築くことを大事にコツコツとみな一緒に進んでいる。支援する、されるの一方通行ではなく。施設に塀がないことと同じく、向き合う人々同士に見えない壁がないことがしみわたっている「あおいけあ」の日常。

過剰にリスクマネジメントを問うことは、業務を安心安全に進めることが主眼となり、そこに関わる人の心が置き去りにされていく。効率化に走りやすくもなり、管理と支配で業務を動かし収益率を上げることを最善とする事業所の都合がルールとなりかねない。福祉で医療でも人が置き去りになるやすい状況がある。

しかし、加藤さんはただ単に介護業界の視点で考えるのではなく、実に視野を広くもち「豊かにあること」を丁寧に探っておられる。そのことが誠実なところを持つ仲間をより鼓舞し、加藤さん一人ではなく、ここちよい広場が形成されている。介護や福祉だけの視点では起き得ない発想と行動。しかし、大事な部分の介護と福祉のスキルをきっちり活かして、人生の先輩たちとの出会いをより豊かにしている。

その輪を地域との交わりでより潤いを広げている。地域の人々も微笑む場を求め自然と集まる。

緻密に繊細に関わる環境をつくる中にいて認知症の方々も自分の役割や自分なりの楽しみ方を手にして、生き生きとされている。

福祉でも医療でも教育でも、制度や仕組みが密かに生きづらさを助長するものである部分はある。そして、その制度や仕組みをうまく手際よく使って成果を上げること一生懸命になってしまう人々がいる。それに結果利用される人がある。

生産性や成果は必要、でもそれだけを見ていたらおかしくなる。管理をしたり、支

配をしたり。大勢の考えにくくられて自由を奪われる人がでてくる。いや、出ている。

そんなものを吹き飛ばすような、極々あたりまえのことだけど、なかなかできにくいことをやり通している加藤さんの実践は、色々と考えを巡らすことばかりである。

加藤さんは3.11の後、被災地に何度も東北にボランティアに行かれていて、その時に出会った異業種の方たちとNPOを立ち上げられている。まちづくり、地域ごとをよくしていくために。

私自身携わる障がいがある人が表現することでも、基本は「人」の成り立ちのことである。そもそも表現も芸術もなんの枠もなく、「障がいある人の表現する」という表現もおかしいところで。しかし、この辺のことでもやたらと専門家ぶったり、言葉で区切ったりする世間の様子は、納得行かない。

しかし、自分自身が概念で理解することと実際の動きのズレも認識しながらではある。

様々作られているいろんな枠を越える時に、一時の情感だけでは成り立ちにくいこと、しっかりとした考え思いと意思、そして深める知識と技術。映画と加藤さんの実践に様々に叱咤激励を受けた。

色んな領域にも通じることに感じた。

主催くださった、宮崎もやいの会さん、実行委員さん、貴重な機会をありがとうございました。

ケアニン2の映画も観てみたい。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

前川 吉晴（ソーシャルワーカー）

映画『ケアニン』。死の床で敬子先生の息が荒い音を立てている。その敬子先生に、介護スタッフが順にお別れをしていく。2回目で初めて気付いた。看取りをしてきたスタッフだから、最期がわかるのだと。看取りを当たり前に行っている加藤さんたちの実践が、この場面にも反映されていた。

15年前に亡くなった父は、私の目の前で息を引き取った。父を挟んで向かい側の弟と話していて、息の荒い音にハッと気付いて父を見た直後に、心臓が止まった。荒い息が始まってどれくらい気付かなかったのかわからないが、父が別れを告げていたのにわからなかったと、悔やまれた。

副題の「あなたでよかった」は、介護を受ける利用者やその家族の、介護スタッフに対する言葉ではなく、介護者が支えさせていただく高齢者に向けての言葉だという加藤さんの言葉。身をもって人間が生き、死ぬことを体現された先達に、触れ、関わって、この身をもって学ぶこと。そのことの価値。

当たり前のことを当たり前に行っているだけと、加藤さんは言われる。一人のご利用者にアセスメントを徹底し、そこで見出したストレングスから個別支援を始めてゆく。すると、「困った人」はいなくなり、周りのために働き、地域起こしの人材にすらなる。

「べてるの家」へ加藤さんは何をしに行ったんだろうと思ったが、考えてみれば、精神疾患を抱えた人たちと認知症を抱えた高齢者が、北海道と神奈川で共に地域起こしをやってるんだと、わかった。

当たり前のことを当たり前にすることで、人間の尊厳を、具体的に肌身に感じながら触れ、知ることができる。生きる意味を、学ぶことができる。そういう仕事をし、そのように、今からでも生きていきたいと思う。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

前畑 和樹（介護福祉士・准看護師）

今回スタッフとしてイベントのお手伝いをしました。多くの方が加藤さんの一言一言に大きく共感し、介護というものを改めて考え、気付く機会を与えてもらったのではないのでしょうか？「現実は…」とか「そんな事を言われても」とか「宮崎では出来る訳ない」と思う方もいるかもしれませんが、それは意見ではなく、“言い訳”に過ぎないと思います…。

まず始めに、映画『ケアニン』の上映会。私は受付にいたので、一緒に参加した私の妻の感想より、「(主人公が)私かと思った」、「(介護福祉士として)今までやってきた事は間違っていないと再認識出来た」と、開始早々涙しながら観賞。真摯に利用者に向き合っているだけなのに、したい事が出来ないもどかしさ、人と違う事をしようとすると制止させられる事も多々あり、マニュアル通り・ケアの統一という、介護には相応しくない見せかけの言葉に左右され続けた、根っからの介護人には、私は間違っていないと感じる映画に出会えたのだと思います。

そんな映画の上映中に一人の杖をついた女性が外に出てきました。「先は長いわね…」と一言。映画が長いのかな？と思いながら話を聞くと、夫が認知症の診断を受け、今度認定調査を受けるとの事。映画を観ていたら、先の見えない不安から先ほどの一言が出てきたようでした。大丈夫だろうか？と思いましたが、子供さん含め専門家にたくさん話をしてアドバイスをもらっているとの事で、まずは一安心。「困った時にはすぐに誰かに相談してくださいね」とありきたりな事をお伝えすると、笑顔で「ありがとう」と一言。こういった、何げない所で、介護の話を笑顔で出来る環境も大事だなと感じました。

後半は、講演会。「自分がされたら嫌なことを人にしてはいけない」、「7 時間デイルームの椅子に座れますか？」など、理想論ではなく、ごくごく当たり前だけど、介護の現場には耳が痛くなる事を、ぶれずに真っ直ぐ介護の道を歩んできた加藤さんならではの嫌みを感じさせない聞き心地のいい語り口で、あっという間の講演会でした。

その中でも、「代表は、職員が利用者の事を考えるように考える事を考える」と、主役は利用者であり、職員はそれを支援する人であり、代表は何があっても責任を取る立場であると言われました。私事ですが、以前デイケアで管理者として働いた経験があり、“責任は自分が取るから、職員には(利用者の為)やりたいようにやってもらおう”と心に決めて働いていた事がありました。人間関係や外部・他部署との連携など、色々と悩み・試行錯誤しましたが、自分の考えは間違っていなかったんだと、背中を押してもらい、ずっと身体が軽くなった感じがありました。

今回のイベントに参加させて頂き、20代のころデイケアの管理者になり、がむしやりに働き、「まだ若いから」と言われるのが嫌で、県内外問わず休みの日は、介護を中心に人材育成や管理業務など、様々な研修会に参加していた頃を思い出しました。また、自分達で作りたい施設を作る！との思いもあり、広島の宅老所に結婚前の妻と車で会いたい人に会いに行った事もありました。今は結婚して、子供も生まれ、すぐにアクションを起こす事は難しい状況にありますが、夫婦ともに非常に有意義なイベントに参加することが出来ました。

有料老人ホームの数は、日本一と言われる宮崎ですが、既存の施設が決して悪いという訳ではなく、現状を変えるというのは大変難しいため、あおいけあ流の取り組みを一つのモデルケースとして、行政がサポートする環境があると、新たに立ち上げたいと思う人たちへの後押しになるのではないかなと思う今日この頃です。

最後になりますが、加藤忠相さん、主催者の宮崎もやいの会小林さん・運営スタッフの方々、来場して頂いた方々とのご縁に誠に感謝申し上げます。
ありがとうございました。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

知覧 由美子（産業カウンセラー）

母親が、自分の見知った母親でなくなる。子どもは、元気な頃の母親のままでいてくれることを願う。母親が壊れていく姿を見るのは忍びない。家族の悲嘆、それに伴う苦痛は、母親には届かない。あいまいな喪失である。そう、喪失感と絶望感と。目の前にいる母親は、元気だった頃の母親ではない。ということを知っているが、受け入れられないし、認めたくないというのが本音ではないだろうか。

主人公の、大森圭が言った。

「認知症になっても、終わりなんかじゃない。認知症で人生終わりになんて、僕がさせない。」

圭のような「ケアニン」がいてくれて、どんなに心強いことか。家族だからためらうことがある。他人だから出来ることがある。認知症は、神様が与えてくれたギフトではないかと思う。過去にあった出来事の苦しみ、辛さ、悲しみ、痛みなどを緩和してくれるように感じる。

病気を見るのではなく、その人を見るようにしよう。そこには、優しくった母、美味しい料理を作ってくれた母、温かい母、心配してくれた母、強い母がいるではないか。ライフスタイルの中に、その人らしく生きるヒントがある。身体の中に閉じ込めている、それぞれが持っているキャリアを引き出して、自分の人生を最後まで生き切る。

家族が家族でいられるうちに、一緒に食事をしよう。気に掛けよう。同じ時間を共有しよう。最期の看取りについて話し合おう。

すでに超高齢化社会を迎えている日本の介護は、世界中からその動静を見られている。日本が最先端のケアを示していけば、日本モデルとして、世界に発信できるのではないかと思う。その最たるものが、心優しき「ケアニン」たちである。これから介護を必要とする親のこと、自分のことを考えさせられる映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会だった。

映画のモデルとなった「あおいけあ」は、地域の住民を巻き込み、地域に根付いた施設である。そこは、いつも笑顔があり、温かい食事があり、家庭のような居場所になっている。それこそケアの理想である。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

匿名（精神保健福祉士）

「ケアニン」素晴らしい映画と、映画のモデルになった施設経営者加藤さんのお話、共感することばかりで、胸が震え、本当に元気をもらいました。

将来の“職業”として福祉分野が私の視野に入ってきたのは、30年前、中学1年生の時。入院している曾祖母の姿に、胸が痛んだ経験をしたことでした。

自力でトイレに行けない、日常生活で自分の気持ちを伝えることができない…、今までできていたことができなくなるってどんな気持ちだろうか…と、いたたまれなくて、とても複雑な気持ちでした。すぐに『ルポ・老人病棟』という本を読みました。

それ以前、小学生の時は、自宅に出入りしていた脳性マヒの青年に対する社会の偏見に気が付いたとき、子ども心に「知らない」は偏見を生むのだ、と刻まれたのを覚えています。

『社会福祉学』を学びたくて大学に行き、卒業後は子どもの医療や障害福祉の現場で日常生活の援助や療育・直接ケアの仕事をしてきました。現在は病院でソーシャルワーカーとして働いていますが、どんな現場でも、それぞれに大切にされていることがあり、支援のスタンスに違いがあるのを感じます。

しかし、一番大事にされなければならないのは患者さん本人の気持ちであり、支援する側になるならば、患者さんの立場にいかに関わり添おうとするのか、そのマインドや精神性が問われるはずで。

けれども現実には、「とは言ってもね…」「そんなのきれいごと」と、できない理由を探すケースがいかにかに多いかを感じる日々です。

福祉や医療の現場こそ、私は理想を掲げ行動することが大事だと思っています。加藤さんの話からも、理想を実現するためにどうしたらいいのか？を考えていいのだ、と改めてエネルギーをいただきました。

映画で、利用者の女性を看取る際、オレンジの果汁を与えるシーンがありましたが、私は、そう行動せずにはいられなかった主人公の新米介護士さんの心の動きがよく解りました。何をしても難しい、そんな状況だとしても、本気で相手と向き合って過ごしてきたら、必ずやってあげたい事が見付かるものです。

人によっては、客観視できていない、一歩引いて現実を見よ、と批判されるかもしれませんが、客観視することが必要な時もあります。しかし、誰のための支援なのでしょう。

独り善がりはいけません、そのギリギリのところまで悩むぐらいの関わりを、利用者さんや患者さんと重ねていきたいものです。

そこに対人援助職の醍醐味はあるはずだし、福祉職はそれが魅力の職業です。大変なこともあるけど、誇り高いお仕事ですよ。

私が大切にしたいこと、また少しずつ日々の業務のなかに織り込んでいけるよう、がんばります。

ありがとうございました。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

嶋田 喜代子（介護福祉士・精神保健福祉士）

私は40年間福祉現場で仕事をしてきて、人としてとても大事な「触れ合い・交流」を通して沢山のことを学んできました。

一人一人が持つ「生きる力」、私はいつもそれを信じて仕事をしてきました。今回の映画・講演を通して、加藤氏が言われる「その人が何をしたいのか？という生き方をしてきたのか？何に誇りを持っていて、どういう仕事をしてきて、何食べて生きてきたのか…等、情報を集めて、それらができる状況をつくっていき、その人の能力に頼ること、それが一番のケアであり、自立支援につながる」という介護のスタンスは、私の考えと全く同じで共感を覚えます。

目の前のその人とアイコンタクトをとり、その人の話に耳を傾ける時「過去・現在・未来」の話をされる。そうなんです。その人が歩いてきた道のり・生活・歴史がとても大事。

そこから、その人に最もふさわしいケアが出来ていく。もちろん、その人の意向・気持ち・考えを聴きながら…

映画「ケアニン」は介護現場で働く新人の介護福祉士が試行錯誤しながら成長していく姿を描いたものだが、そこには介護現場の3K（きつい・汚い・危険）というイメージを払拭する程、人と人との織りなす温かく優しい触れ合いがあり、「介護の現場って素晴らしい」「介護の仕事はとても魅力的」「介護の仕事はやりがいがある」「誇りを持って介護の仕事をしたい」と思わせるものでした。

加藤氏が運営されている地域に密着した小規模多機能施設は「ありのまま」「普通」「当たり前」の日常で、利用者も職員も地域住民の一人として生き生きと自然体で生活されています。

さて、加藤氏のような運営をどれだけの人が、日本で宮崎で実践されているのでしょうか。

日本の施設の在り方も考えてほしい。ハード面・ソフト面のバリアを取り外して、加藤氏の実践が全国津々浦々に広がることを期待します。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

平川 和美（団体職員）

昨日は、宮崎市民文化ホールで、介護福祉士が主人公の映画『ケアニン』の上映会と加藤忠相氏の講演会に参加しました。

新米の介護福祉士が、実習先だった小規模多機能型施設に勤務し、様々な問題や悩みを抱えながらも利用者へ真摯に向き合い介護福祉士として成長するストーリーには、すべての俳優さんの演技がとても自然に演じられて、ひとつの施設をそのまま眺めているようでした。

ケアニンとはケアをする人（ニン）で、ドラマ『下町ロケット』や『沈まぬ太陽』の演出を手掛けた鈴木浩介監督作品。演出には言葉掛けや接し方など、介護に携わる家族や介護事業者はもちろん、ケアニンを鑑賞したすべての皆さんが何らかの気付きと自己の振り返りがあったと思います。

それは、普段のありふれた日常にあるもの。意識しなければ、気づかない大切なもの。

昨日は、胸が熱くなりまして直ぐには上映会について載せることができませんでした。

介護を Care と言いますが、ケアの本来の意味は大事に思う、思いやりを持って考える、心配する、気を使う、慈しむ、愛している、でして、介護という言葉はありません。

あえて介護を Care で表現するなら『気にかける』という意味なのだとか。でも、この気にかけるには、先に載せた意味の全てが込められているように思います。

ドイツを手本にしたとされる日本の介護保険制度。入所施設や通所施設も、長い間通常のルーチン業務と記録に追われ、目の前の利用者が見えていない介護が行われていないか。

また、制度だけが優先され、望ましい介護と質の問題がまだまだ置き去りにされてはいないかなどなど、広い範囲で振り返るよい機会になりました。

映画上映と講演会をご案内下さった『宮崎もやいの会』さま、本当にありがとうございました。

この春、映画ケアニン2が公開されるそうなので、こちらも楽しみです。

映画「ケアニン」と加藤忠相氏の講演会に参加して

矢野 秀蔵（私立大学助教）

今回、認知症のケアという視点で介護士、小規模介護施設の実践、取り組みについて映画と加藤忠相氏の講演会に参加する機会に恵まれた。

【映画「ケアニン」について】

今回、鑑賞するにあたり、私自身は主人公である大森圭もさることながら、その認知症の家族である星川光彦（長男）が、母が認知症になったことが受け止めきれない、その心情について考えさせられた。認知症になった母に「しっかりしてくれ」、妻に「俺も（仕事で）忙しいんだ」という姿が見られていた。

昨今の家族の在り方を考えると、家族だけで認知症に限らず、疾患を抱える家族を見ていくことは綺麗事では済まされない難しさがあるであろう。まして医療の専門家でも無い家族であれば、認知症の症状から「本人にとっては目的のある」徘徊や、記憶の欠落から本人は、物が盗られたと考えるしかない「妄想」も当事者家族からすれば、「（いままでそんなことなかったのに）何やってんだよ」と悲しみや怒りになるであろう。

そんな厄介者になってしまった親（当事者）との向き合い方を少しずつ変えたものは何か。それは親の症状が軽快したからでは無かった。家族（光彦）の当事者の見方が変わったからだ。当事者の思いに耳を傾け、認知症になっても出来ることがある事を、介護通して目の当たりにした事で、当事者への見方が厄介者から母へと戻り、母の最期には、子として、これまでの思いを吐き出すこともできた。ここで介護も看護もそうなのだろうと私は思った。専門職者として患者だけ見ていけば良いわけでは無いのである。患者も含め、「家族」も見ていく必要が、ここにあると再認識することができた。

【加藤忠相氏講演会について】

加藤氏については恥ずかしながら、お名前は存じ上げていたものの、小規模介護施設としての取り組みについては、その詳細は存じ上げていなかった。しかし、映画鑑賞後、講演会を聞いて私が感じたことは、「いつまで管理する介護（医療）でやるのか、地域で、地域もみていかないのか」ということだ。

加藤氏だからできた、という話では無い。何か特別に支援を受けていた「あおいけあ」でもない、行政支援が整っていた地域というわけでもない。当事者の活かせる力（能力）を引き出させ、地域も巻き込みながらの介護を実践された結果である。

精神科疾患を抱える現在の精神科医療も、施設内に囲みすぎた結果、その症状が落ち着きを見る患者が長期の地域社会との隔絶から、患者が社会に戻る事を尻込みさせ

てしまい医療者も社会復帰を困難と考えるケースは少なくない。全ての精神科患者を地域に戻せ、は地域の受け皿の整っていない中行っても、地域も患者も共に困るであろうし、急性期の患者には治療の必要な期間もあることは否定しない。

これまでの地域社会には、精神科疾患を抱える者は病院の中に隔離され、精神科疾患のいない地域社会が地域社会とされていたのではないだろうか。ここに「あおいけあ」に繋がるものを感じた。開かれた、地域の中にある支援が必要とされているのではないだろうか。